続・演習林と珈琲の百年物語

菅　大志（北海道大学台湾同窓会・北海道大学農学博士）

はじめに

本誌 2017 年 12 月号の拙著「演習林と珈琲の百年物語」の最後に、「しかしながら、このときみんなで味わった百年前に植えられたコーヒーは既にない。だから、この百周年を記念し、埔里の宝、演習林を守るためにもう一度埔里のみんなで演習林にコーヒーを植えたいと思う。」と書き筆を置いた。それを書いていた 8 月頃は、まだこの「コーヒーを植えたい」という夢を諦めていなかったのである。

百年祭ポスター

そして、2017 年 12 月 10 日、埔里町の旧北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林にて、「埔里演習林珈琲伝承百年・水沙連珈琲節」が開催された（ポスター参照）。これは、1917 年に創設された北大台湾演習林の百周年を記念し、主催が埔里町役場、メインスポンサーとして地元の Feeling18、埔里在住の北大卒業生の私が発起人となって行われたものである。電車もない小さな田舎町の祭にも関わらず、千人を超える賑わいを見せ、スポンサー、主催者、来賓者、参加者みな笑顔で円満に幕を閉じた。このように、この百年祭（以下このように略す）は、開催当日だけ見ると、順風満帆に目的港に到着したかのように見えたかもしれない。

しかし、発起人の私から見れば、逆風満帆の日々であった。逆風でも帆船は進むことができるそうだが、開催当日まで本当に開催できるのか不安な毎日だった。百年記念祭ゆえに、必ず 2017 年 12 月までに行わなければならないため、延期不可能。開催一ヶ月前の 11 月、百年祭の趣旨であったコーヒーを植えることが不可能になり、一時は開催中止に追い込まれた。しかし、どんな逆風でも私をしっかり支えていたのは、前稿に述べた「北大に対する恩返し」と「絶対に最後まで諦めない」の二つの思いだった。本稿では、百年祭についてその舞台裏とともに紹介したい。

「PULI 1931 海の向こうの珈琲園」

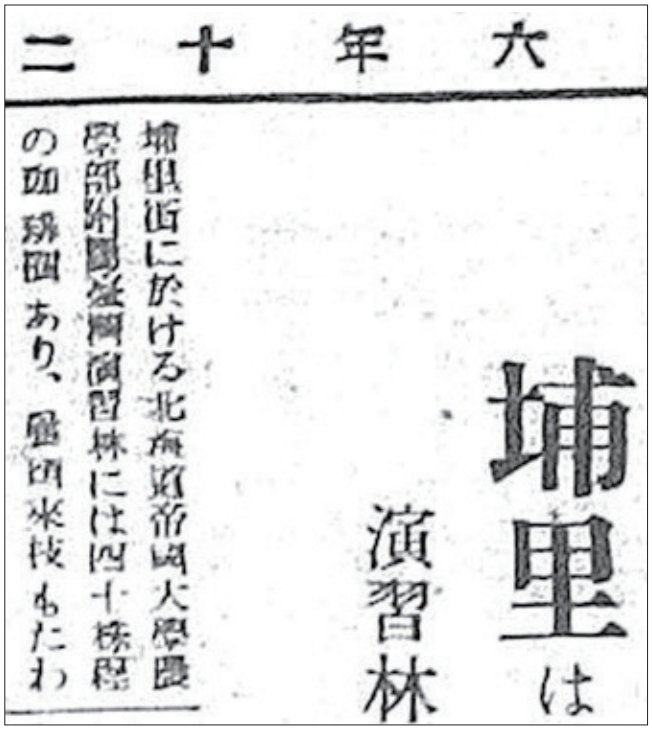
「KANO 1931 海の向こうの甲子園」という台湾映画がある。この映画は日本統治時代の台湾で嘉義農林学校（写真参照）が 1931 年台湾代表として甲子園に出場する史実に基づく物語である。

嘉義農林学校

どんな逆風の中でも嘉農球児達が甲子園出場、そして優勝を目指す「絶対に最後まで諦めない」根性は見る者の心をつかんで離さない。

丁度同じ年、「PULI 1931 海の向こうの珈琲園」があった。1931 年の台湾日日新報に、「埔里街に於ける北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林には四十株程の珈琲園あり」とある（図参照）。埔里の北大では、甲子園ならぬ珈琲園で沸き立っていたのである。

日本統治時代の台湾ではこのように北大台湾演習林があり、さらに 300 人を超える北大卒業生が台湾各地で活躍していた。そして、この嘉義農林学校にも 6 人の北大卒業生がいた。初代校長を含む 4 人の校長、2 人の教諭が、嘉農球児達をしっかり支えていたのである。



大　年　十　二

埔里は

演習林

埔里街に於ける北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林には四十株程の珈琲園あり、屋内來技もたわ

1931 年北大珈琲園の新聞記事

校長は、初代、柳川鑑藏（1906 年卒）、二代、樋口孝（1914 年卒）、五代、鹿討豊雄（1922 年卒）、七代、服部正夷（1923 年卒）。教諭は、高橋信成（安藤信成）（1920 年卒）、茶谷太郎（1928 年卒）である。

このように嘉農球児達は北大の先輩達の教えを受けながら、甲子園を目標としていた。映画の中では、監督や球児が「甲子園！甲子園！」と連呼し鼓舞するが、それが私には「甲子園！甲子園！」ではなく「珈琲園！珈琲園！」に聞こえてきたのだ。さらに、嘉農球児達の「絶対に最後まで諦めない」根性は、まるで北大の先輩達からのエールのように心に響き、逆風満帆の私をしっかり支えていたのであった。

台湾に渡ってきた北大卒業生にとって、北大台湾演習林の存在は心の支えになっていたに違いない。なぜなら北大台湾演習林にある北海道式菱葺屋根の事務所（写真参照）は、北大卒業生が見れば必ずや札幌の北大を思い起こさせるからだ。前稿で写真付きで述べたように、北大発祥の地にある重要文化財の時計台（1878 年）、北大植物園にある重要文化財の博物館本館（1882 年）、開拓の村にある北海道大学の学生寮（1905 年）、北大にある有形文化財の古河講堂（1909 年）、国の重要文化財、札幌農学校第 2 農場（モデルバーン）の建築群（1877）などに同様の菱葺屋根が使われているからだ。

だからこそ埔里に住む北大卒業生の私は、どんなに逆風でもこの菱葺屋根の事務所を守るため百年祭をやり遂げなければならない。それが、「北大に対する恩返し」になると信じ、「絶対に最後まで諦めない」と心に誓っていたのである。

ちなみに、菱葺屋根が北海道で多用された理由

として、興味深い話を北大演習林の秋林先生から伺った。それは、「この菱葺屋根は、雪に強い利点はあるが、雨音が反響しやすい欠点がある。しかし、北海道には台風や豪雨がほとんど無いため、この欠点とは無縁だったのではないか。」ということだった。

北海道式菱葺屋根の事務所

日本統治時代の台湾で活躍した北大卒業生

それでは何故、台湾から最も離れた北海道から300人を超える北大卒業生が台湾へ渡ってきたのだろうか。

台湾総督府は「工業日本、農業台湾」をスローガンに農林政策に注力していた。そのため、農学を修めた優秀な人材を渇望していたからだ。

丁度その頃、北海道の札幌では、当時日本最高レベルの農学教育が行われており、日本中から優秀な学生を集め、農学を修めた優れた人材を輩出していた。これが北大農学部（札幌農学校（1876-1907）、東北帝国大学農科大学（札幌）（1907-1918）、北海道帝国大学農科大学（1918-1919）、北海道帝国大学農学部（1919-1947））である。

領台当時、北海道同様に開拓の余地があった台湾において、北大での開拓精神の元、農学を学んだ人材はまさに打って付けだったのである。その結果、50年間で302人の北大卒業生が海路はるばる台湾に渡ってきたのだ。この数字は山本美穂子（2011）「台湾に渡った北大農学部卒業生たち」から算出したが、これは本科生だけの数であり、実科生（北海道帝国大学附属農林専門部）を含めるとさらに増える。

台湾で特に評価が高く銅像にもなっている北大卒業生は3人おり、台湾糖業の父、台湾総督府技師、新渡戸稲造（1881年卒）、蓬莱米の父、台湾総督府中央研究所技師、台北帝国大学理農学部教授、磯永吉（1911年卒）、台湾紅茶の父、台湾総督府中央研究所魚池紅茶試験支所三代所長、新井耕吉郎（1925年卒）である。

この魚池紅茶試験支所は3人歴代所長がいるがすべて北大卒業生であり、初代、谷村愛之助（1915年卒）、二代、古市誠（1918年卒）、三代、新井耕吉郎（1925年卒）である。このように北大は台湾珈琲だけでなく、台湾紅茶にも大きく関与していたことは非常に興味深い。

さらに、農林教育方面でも北大卒業生は重用され、以下の学校の初代校長（学部長）は北大卒業生である。

中等教育として、前述の嘉義農林学校、宜蘭農林学校、屏東農業補習学校（屏東農業学校）、台南農業学校。

高等教育として、台北高等農林学校、台北帝国大学附属農林専門部、台中高等農林学校。

大学教育として、台北帝国大学理農学部。

特に、大島金太郎（1893年卒）は台北高等農林学校、台北帝国大学附属農林専門部を歴任した後、台北帝国大学創設準備委員となる。こうして台北帝国大学の創設に尽力した結果、台北帝国大学理農学部の農学系15講座のうち、14講座までも北大卒業生が担当教授となった。

以上のように、日本統治時代の台湾では農林分野で北大卒業生が大活躍していたのである。

発起人が提案した百年祭の趣旨

これまで述べてきたように、台湾で活躍する北大卒業生の心の支えとなっていたに違いない菱葺

屋根の事務所を守ることは、「北大に対する恩返し」となるに違いない。そのため、北大台湾演習林百周年記念事業として以下のように行いたいと考えていた。

埔里の北大台湾演習林には、百年前に植えられたコーヒーの木があったが今はない。

また、百年前に北大が建てた北海道式菱葺屋根を用いた事務所が台湾の歴史建築文化財に指定されているが、これを説明するものがない。

そこで

① コーヒーの植樹祭

② 歴史建築文化財の看板を作り除幕式

上記の二つを実行することによって、埔里の珈琲関連産業および観光業に「台湾珈琲の故郷」として付加価値をもたらし、百年の歴史建築文化財は、より歴史的価値を高めると考えていた。これは私個人の母校愛などではなく、埔里の町人の利益につながると考えていた。費用的にもコーヒーの木は私が準備するので、看板代だけである。単純にこれだけのことであり、協力者探しにこれほど苦労するとは思いもよらなかった。そして結局、この二つは後述する理由で百年祭で実行されずに終わってしまうのであった。

協力者を探す

この演習林の土地および建物は、現在台中にある中興大学の所有となっているが、維持管理は埔里町が行っていた。この取り決めは2005年に締結されたが、私はその際の経緯を早い段階から知っていた。そのため、中興大学を説得するよりも、埔里町を説得するほうが可能性があることを知っていた。そして、埔里町が動けば、中興大学も連鎖して動くに違いなかった。実際に埔里町は、管理の名目で様々な樹種の苗木を植えて緑化しており、コーヒーの木を植えるのも同じなのではないかと考えていた。

また、埔里町は「町長珈琲時間」（図参照）という野外イベントを毎月第一土曜日に行っており、その際には必ず埔里珈琲生産組合に協力を求めていた。そのため、この百年祭を開催するにあたり考えられる最善の方法は、埔里珈琲生産組合が旗振り役となり、埔里町を主催とすれば、埔里町民と一緒にコーヒーの植樹ができるのではと考えていた。そのため、まずこの組合に入ることから始めることにした。

町長珈琲時間

埔里珈琲生産組合

2015年4月。私達夫婦は埔里珈琲生産組合に加入し、珈琲に関する具体的な勉強を始めた。しかし、埔里は「台湾珈琲の故郷」にも関わらず、生産者生産量ともに少なく、珈琲栽培だけで生計がなりたっている専業農家は一人もいなかった。組合員は20人いたが、殆どの組合員は先祖代々の農地を有効活用するために、趣味的に植えているという感じだった。そのため、埔里珈琲生産組合の活動は不活発で、「町長珈琲時間」を毎月第一土曜日に手伝う以外の定期的な活動は何も行っていなかった。しかし、その組合員の中で、非常に熱心に珈琲と向き合っている篤農家がいた。

この人をXさんとする。Xさんは台湾珈琲界では顔が広く、百年祭を実行するためには無くてはならないキーパーソンであった。つまりこのXさんを味方につければ鬼に金棒であるが、逆にX

さんを敵に回すと、Xさんとつながりのある人まで敵に回すことになり、百年祭の成功はないといっても過言ではなかった。

Xさん夫婦と私達夫婦の付き合いは、組合加入後すぐに始まり、アポなしでお互いの家を訪問しあったり、台湾各地の珈琲園や珈琲イベントなどに4人で参加するほど良好な関係が1年程続いた。

2016年3月。「町長珈琲時間」で、Xさんに2017年に演習林が百周年になる話を持ちかけてみた。北大の話を出すと嫌われることがわかっていたので、埔里珈琲百年という歴史を強調して慎重に話をしてみた。ところが、この話に関してはXさんの反応は「無関心」であった。同月末の組合会議の議題に取り上げてくれるように頼んだものの無視され、私が議題提起することになった。結局この件以降、Xさん夫婦との関係は決裂してしまう。

2016年7月。3月の提案は少し早すぎたかも知れなかったが、その後、何も進まないことにあせりを感じ、7月にXさん夫婦、幹部夫婦、若手組合員と私達夫婦が参加し、もう一度百年祭について話し合いの場が持たれた。その結果、埔里珈琲の知名度アップにつながるとして、この百年祭のゴーサインがでた。そして、まず若手組合員が企画書をつくることになった。

2016年8月。この企画書が完成し、「町長珈琲時間」にてXさんに手渡した。結局それから9月、10月の「町長珈琲時間」で確認したところ、企画書が放置状態であったため、Xさんを通すことを諦め、私と妻は町長に百年祭について直訴した。

2016年10月。その結果、10月末に町役場にて町長とXさん、組合幹部、組合員、黄先生を含めた会議が行われた。この町長会議はこの百年祭の企画書を元に1時間ほど和やかに進み、そのままゴーサインとなった。2017年の秋以降を目標に、予算的にも問題は無いので、コーヒーコンテストも同時にやりなさいという町長さんの提案があった。

2016年11月。私の妻が臨月に入り、この百年祭の準備が思うように出来ないまま、とうとう2017年になってしまった。その後も私達夫婦が出産育児で何もできないばかりか、案の定Xさんに忖度して誰の協力も得られないまま、気がつくとあの町長会議はまるで無かったかのようになっていった。

2017年4月。埔里珈琲生産組合の任期満了に伴う幹部選挙が行われ、百年祭を反対するXさんが再選された。その結果、この百年祭の企画を組合で進める可能性は完全に消滅した。

協力者が決定

2017年9月。埔里を代表する画家で、埔里珈琲大使でもある黄先生のアトリエでは、毎週金曜日の午前中、埔里の日本人が集まる。私達夫婦も参加していたが、9月1日に地元の有名店Feeling18董事長茆さんが県会議員を連れアトリエに訪れていた。実は黄先生は私のことを常に心配して、様々な人にこの百年祭の話を打診し続けてくださっていたのであった。黄先生曰く、「日本人が諦めないで頑張っているのに、台湾人が諦めてはいけない。」と笑顔で答えてくれた。黄先生の協力がなければスポンサーは見つからなかったのだ。

9月8日。Feeling18の董事長茆さんの自宅にて、Xさん、黄先生、議員、埔里の名士、埔里の日本人を集めてこの百年祭について意見交換が行われた。ここに集まった人々は演習林が百周年であり、珈琲が植えられていた事実はもちろんのこと、菱葺屋根の事務所が特別なものであることに非常に驚かれ、「百年祭を是非やりましょう」ということになった。そして、このFeeling18董事長茆さんがスポンサーとして正式に協力してくれることになった。

錨を上げて出航

9月8日　百年祭実行委員会として出航
9月22日　埔里町長が会議に出席
10月18日 埔里町長に中興大学への公文を依頼

毎週金曜日の午前10時からFeeling18にて、茆さん、黄先生、イベント担当者、イベント業者、埔里日本人会を主な会員として計12回会議（写真参照）が行われた。尚、この会議のお陰で埔里日本人会が発足した。

まず企画書を作成し、百年祭の趣旨、日時場所、活動内容と担当者、協賛者、予算など極めて具体的に準備が進み始めた。

活動内容としては、コーヒーの植樹祭、歴史を説明する看板とその除幕式、珈琲豆飛ばし大会、百人名人珈琲などを予定し準備が進められた。また、LINEを用いてサポートメンバーを募り、会議の内容などを報告した。

Xさんはスポンサーから埔里珈琲生産組合の代表として、参加が強要されていたが、4回目以降会議に参加しなくなり、11月10日に百年祭参加を拒否したが、百年祭当日までLINEのメンバーは続けていた。

会議中　奥中央は茆さん

暗礁に乗り上げる

10月19日。中興大学演習林責任者に企画書を提出
11月2日。中興大学がコーヒーや看板に難色を示す
11月6日。埔里町を通じ中興大学へ公文を提出

埔里町が百年祭の企画書を公文として中興大学へ送ったため、その公文内容は受理されるはずであった。ところが、私が希望したコーヒー植樹と看板設置は両方とも拒否され、土地の使用にあたり、幾つかの禁止事項が課せられた。こうして中興大学がこの百年祭への難色を示したために、一時は中止の決断が下された。

しかし、私は二つの目標を失っても、「絶対に最後まで諦めない」と訴え続けた。

逆風満帆で前進！

11月10日。開催日正式決定
11月18日。新聞に百年祭の記事が掲載
11月23日。ポスター完成

一時は中止を決断したが、土地の使用許可は取れたので、強行が決定した。

このように、台湾では、約束は約束として存在するが、それを守るか守らないかは別の話ということが良くある。

こうした理由で、中興大学を刺激しないように、記者会見、マスコミ取材、宣伝活動、ポスターなど控えざるを得なかった。

北大演習林（札幌）に連絡

2016年4月11日。

3月に埔里珈琲生産組合の会議にて百年祭について提案したので、本格的な準備を始めるべく、北大演習林（現北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション）に埔里の北大台湾演習林が来年百周年を迎えるにあたり、台湾演習林の史料に関して問い合わせのメールを送信した。しかし、このメールに返信は来なかった。

2017年1月9日。

町長から百年祭開催のお墨付きを得たことを強調し、もう一度北大演習林にメールを書く。すると今度はすぐに返信が来た。このメールを返信していただいたのが、今回、百年祭に参加された間宮さんで、同じく参加された秋林さんを紹介していただいた。秋林さんによると北大演習林の会議記録に、台湾演習林のコーヒーに関する記述を発見したことを教えていただいた。

2017年11月12日。百年祭の開催日が決定し、秋林さんにメールを送ると、翌日メールを頂く。

2017年11月20日　秋林さん、間宮さんが百年祭に参加していただけることになった。

メールを担当した間宮さんによると、一回目のメールに返事をせず、二回目のメールに返事をしたのは、一回目のメールには北大卒業生と書かれていなかったからだと教えていただいた。つまり、北大卒業生という肩書きがなければこの返事はいただけなかったということである。埔里に住む北大卒業生の私以外にこの百年祭を実行できる人間はいなかったということであり、最後まで諦めなくて本当に良かったと思った。

また、12月11日に年に1度の重要な会議に出席するため、演習林長にあたる佐藤先生が参加できない代わりに、佐藤先生に挨拶文をしたためていただけることとなった。

12月5日　この挨拶文が完成し、先にメールでその内容を送っていただいた。これを読んだ瞬間、私は百年祭当日、もし反対勢力に妨害され開催されることができなくても、それでも構わないと思った。これまでの苦労が一瞬で報われた思いに包まれた。

百年祭当日

12月10日日曜日。天気は快晴。前日まで続いていた雨も止んで最高のお祭日和となった。10日前からずっと天気予報を見て心配してきたが、杞憂に終わった。設営は完成しており、懸念していた妨害もなさそうだった。出店としてブース（写真参照）が25個出来たが、1000人を超える人出に商品がすぐに売り切れてしまう店が続出した。また、埔里珈琲生産組合のブースもXさん不在

来賓席

ブース

で置かれ、組合幹部を含む 14 人が参加してくれた。さらに、X さんとつながりがあった珈琲関係者も多数参加してくれたのは、本当に百年祭をやって良かったと改めて思った。

開会の挨拶

スポンサーの Feeling18 董事長茆さん、埔里町長、県会議員、立法議員、黄先生の挨拶が続いた後、北大演習林の秋林さんが演習林長の挨拶文を読み上げた（写真参照）。この挨拶文には、百年祭への感謝の言葉とともに「これを機会に、私どもと埔里の皆様が、旧北大演習林を絆に友好関係を築いて行くことができればと考える次第です。」とあり、70 年の時を経て、台湾と日本で遠く離れていた旧友同志が再会できたような気持ちになり、橋渡し役となった私は嬉しくて胸が熱くなった。

秋林さん挨拶文代読

百人名人コーヒー

珈琲農家が栽培し、焙煎したコーヒー豆を、ハンドドリップして淹れてくれるコーヒーは、まさに最高のコーヒーの味わい方である。コーヒーの味を決めるのは、抽出する人でも、焙煎する人でもなく、栽培する人である。抽出や、焙煎はあくまでも栽培された豆のポテンシャルを最大限引き出す技術であり、まずい豆をうまくすることは出来ない。そして、珈琲農家は自分で栽培したコーヒー豆の特徴を熟知しており、焙煎も、抽出も、最適の方法を知っているからだ。さらに、今回は黄先生による演習林事務所が描かれ、「北海道大学 since 1917 埔里演習林珈琲百年」と書かれた珈琲カップにコーヒーが淹れられた（写真参照）。こうして飲むコーヒーは最高に美味しい。

北大演習林の間宮さんと秋林さん

珈琲豆飛ばし大会

日本統治時代この演習林では、黄先生が幼いころに、コーヒーの赤い実を食べた後、豆を飛ばして遊んだという。その演習林伝統の遊戯を同地で再現したものがこの珈琲豆飛ばし大会である（写真参照）。

珈琲豆飛ばしをする子供

「北海道大学 since 1917」の北大カップと赤いコーヒーチェリー

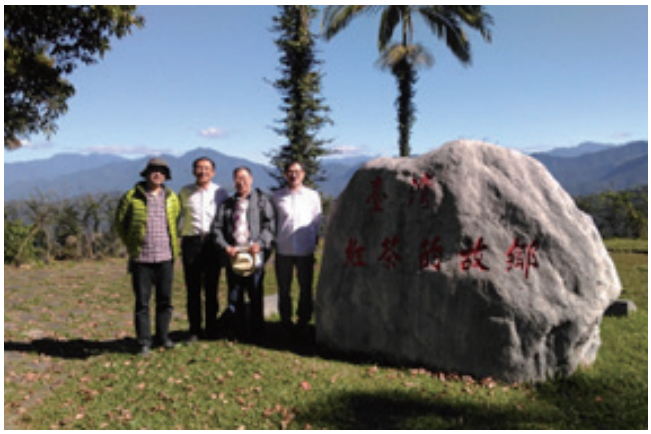
コーヒー豆の入っている赤い実は、コーヒーチェリーと呼ばれている（写真参照）。日本ではチェリー（サクランボ）の種を飛ばす大会があるが、珈琲豆を飛ばす大会はおそらく世界初となる。

このコーヒー豆飛ばし大会は、新結成した埔里日本人会のメンバーが審判となった。まず黄先生が始球式として模範演技を見せて開始した。この遊戯は恥ずかしさとの戦いであり、観客が見守る中、羞恥心に勝たなければ良い記録は出ない。通常コーヒーチェリーには豆が二つ入っているため、二回のチャンスがある点もユニークである。非常に好評であったので、優勝商品として北海道往復航空券を準備して、今年もまた開催する予定である。

日月潭の紅茶試験所

12 月 11 日。百年祭の翌日、北大演習林のお二人を連れて、今回のもう一つの目的であった紅茶試験所（茶業改良場魚池分場）を訪問した。この紅茶試験所は、前述したように北大卒業生三人が所長として活躍した、北大ゆかりの場所である。繰り返しになるが、北大は台湾珈琲だけでなく、台湾紅茶にも大きく関与していたことは非常に興味深い事実だ。

紅茶試験所の入り口にある『故技師新井耕吉郎紀念碑』に手を合わせてから中に入る。ここから先は、許可無く入ることができない場所である。どうして許可が必要なのかすぐにその理由がわかる。試験場は高台に位置しており、そこから見渡す日月潭はまさに息を呑むほどの美しさだからだ。そして、そこには、「台湾紅茶の故郷」と書かれた大きな石碑がどっしりとその存在を主張している（写真参照）。



台湾紅茶の故郷の石碑

少し進むと 1938 年に建造された製茶場を見ることが出来る。こちらの建物も演習林の事務所と同様に歴史建築文化財に指定されている。正面も素晴らしいが、裏側を見ると煙突と屋根付き丸窓があり北海道風情を感じる（写真参照）。

紅茶製茶所の裏側

さらに奥に進むと紅茶資料館があり、その２階に新井耕吉郎の銅像や史料が展示されている。その中には、初代所長の谷村愛之助（1915 年卒）の名前も確認できた。私達は先輩達の息遣いを感じながら、静かに銅像を眺め、自然にしゃがんで写真に納まった（写真参照）。

余談ではあるが、この紅茶試験所は埔里の北大から近く、新井耕吉郎のお嬢さんが埔里社尋常高等小学校に通っていた。そのため、私には新井耕吉郎がお嬢さんを連れて、北大事務所に立ち寄り、北大珈琲と北大紅茶を飲んでいる様子が目に浮かんでくるのである。

新井耕吉郎銅像

終わりに

結局この百年祭では、趣旨であったコーヒーの木を植えることは出来ず、歴史建築文化財の看板を立てることもできなかった。そもそもこの演習林は埔里町民に開放されており、禁止事項など何も無い。そのため、この演習林は 24 時間自由に入ることができ、コーヒーを植えている人もいる。これにならって私も百年祭終了後の 2017 年内に用意していた百年前に北大が植えたコーヒーノキの子孫の苗を 10 本植えた。寝た子を起こすようなやり方をせず、郷に入っては郷に従えで、初めからこうすれば良かったのだろう。

また、看板は作れなかったが、こうして現在までに北大台湾演習林に関する報文が日台で３本掲載され、新聞記事にもなり、百年祭を盛大に行ったことで近隣住民から苦情が来るほど演習林が注目され、この場所が北大であったということは今では埔里の人々の周知となった。そのため、百年祭ではコーヒーが植えられなくても、看板ができなくても、百年祭を「絶対に最後まで諦めない」根性で完遂できて本当に良かったと思っている。

2018 年１月。長い間破損していた菱葺屋根の事務所の玄関部分がしっかりと修繕された。このことから見ても、この事務所は今後より厳重に保存されることになるだろう。また、コーヒーを植えることが許可されなかったということは、それほど中興大学にとってコーヒーが大切なものであったという証拠でもある。今後、中興大学はこの演習林とコーヒーの歴史を復活させてくれるに違いない。

北大演習林から参加していただいた秋林さんと間宮さんには、北大ゆかりの珈琲と紅茶をお土産としてお渡ししたが、これが北大関係者の間で大好評となった。北大が珈琲を栽培していたことや、北大卒業生が紅茶の栽培を研究していたことは全く知られていないからだ。さらに、北大では、温かい珈琲や紅茶を飲みながら研究する伝統がある。そのため、珈琲や紅茶は北大では必需品とも言えるものなのだ。そこに、北大とゆかりがあり、美味しいとくれば、それは欲しがる人も多いだろう。

そのため、今後は北大生協と北大台湾同窓会が協力して、北大珈琲・北大紅茶として商品化する方向で話を進めることとなった。これらが北大珈琲･北大紅茶として商品化されれば、話題となり、日本統治時代の台湾と北大のつながりが、より多くの人に知っていただける存在なるに違いない。その日を夢見て。